

2007年9月9日 大宮教会

普段と違う日を過ごす大切さ

〔聖書〕創世記 1 章 31 節～2 章 4 節

神が造ったすべての物を見られたところ、それは、はなはだ良かった。夕となり、また朝となった。第六日である。こうして天と地と、その万象とが完成した。神は第七日にその作業を終えられた。すなわち、そのすべての作業を終って第七日に休まれた。神はその第七日を祝福して、これを聖別された。神がこの日に、そのすべての創造のわざを終って休まれたからである。これが天地創造の由来である。

〔聖書〕出エジプト記 20 章 8～11 節

安息日を覚えて、これを聖とせよ。六日のあいだ働いてあなたのすべてのわざをせよ。七日目はあなたの神、主の安息であるから、なんのわざをもしてはならない。あなたもあなたのむすこ、娘、しもべ、はしため、家畜、またあなたの門のうちにいる他国の人もそうである。主は六日のうちに、天と地と海と、その中のすべてのものを造って、七日目に休まれたからである。それで主は安息日を祝福して聖とされた。

〔序〕喜びの礼拝

今日は大宮教会の日曜礼拝にお招き頂きまして、有難うございます。大宮教会はバプテスト連盟の出版部門ヨルダン社で、編集者として活躍して来られた坂本嘉親先生が献身して牧師になり、浦和教会の伝道所として発足したのです。ヨルダン社時代の坂本先生の周りには青年がよく集ってわいわいやっていました。私は目白ヶ丘教会で育ちましたが、神学生時代に大久保のお宅の仲間に入れていただいたことがあります。

私は 30 才になる直前に神学校を卒業し、目白で副牧師修行を 3 年弱させていただいてから、札幌教会で 30 年余働き、63 才からシンガポールで宣教師 10 年、シンガポール国際日本語教会を建て上げて帰って参りました。その時連盟の諸教会の皆様を祈り、支えて頂きましたことを心から感謝申し上げます。帰国後は、全国を巡回して報告しましたが、一段落しましたので、この 1 月から川越の臨時牧師として、教会再建に当たっています。

川越も浦和教会の伝道所として、大宮より 9 年後の 1968 年に伝道を開始し、一頃は 70 人の礼拝を守るまでになりましたが、その後衰退して礼拝が 10 人を切る所まで落ちてしまいました。しかし今年のクリスマスには 20 人の礼拝に、そして来年は、30 人の礼拝の群れに戻ろうと、祈りを合わせています。どうぞご加禱ください。

礼拝堂に書道家の菊池さんに聖句を書いてもらい、掲げました。「見よ、兄弟が共に座っている。なんと恵み、なんと喜び」(詩編 133:1)。10 人で礼拝を喜んで守るようにしていたら 8 月の終わりあたりから、神さまが新しい人を連れて来て下さり、なんと 20 人を超える礼拝を続けて守る

ことが出来たのです。びっくりしました。多くの人が魂に渴きを覚えているのですね。礼拝が命のオアシスになると、命の水を求めてオアシスに集って来て下さるのですね。嬉しいことです。

[1] 仕事を休む日

モーセの十戒の一つに「安息日を覚えて、これを聖とせよ」があります。ユダヤ人たちはこの戒めを大変大事にしました。なにしろ彼らは、キリストと自称するナザレのイエスが安息日厳守の律法を破っているのは許せないと憤って、遂に十字架刑にしてしまったのですから、その思い入れたるや並々ではありませんでした。

ヘブル語で「安息」shabathは[やめる・やめさせる・静まる・静める、安息する・休める]という意味を持つ語です。そこから「安息日」shabbathという言葉が生まれました。ですから安息日とは仕事をやめる日・静まる日・休む日です。どうして仕事をやめる日が必要なのでしょう。

出エジプト記 23:12 にも「これはあなたの牛および、ろばが休みを得、またあなたのはしための子および寄留の外国人を休ませるためである」と繰り返されています。「休ませるため」を新共同訳は「元気を回復するため」と訳していてこの方が良い訳だと思います。直接に労働に当たる人たちや家畜にゆっくり休みを与えて、元気を回復させるためでした。労働者の権利とか人権意識が確立していない社会では、雇い主が奴隷をこき使って使い捨てにしていくのが普通でした。それが 3400 年以上も昔の時代に、どうしてこんないたわりの心が強調されたのでしょうか。

十戒は出エジプト記と申命記に記述されていますが、申命記 5 章の方の十戒には、その理由がこう記されています。「あなたはかつてエジプトの地で奴隷であったが、あなたの神、主が強い手と、伸ばした腕とをもって、そこからあなたを導き出されたことを覚えなければならない」(申命記5:15)。自分たちもかつては奴隷だった。でも神さまに救っていただいた。だから神さまは私たちに、今辛い立場にある者をいたわれと望んでおられるというのです。

この心はとても大事ですね。

私は今でも剣道の稽古を続けていますが、5 年前に東京の或る大学の名門剣道部で、4 年生が付け人の 1 年生を殴って殺してしまった事件が起こり、その剣道部は 4 年間廃部の処罰を受けました。「1 年虫けら、2 年奴隷、3 年人間、4 年神さま」だったそうです。焼きを入れられ痛めつけられても這い上がってくる者が強くなると言うのです。付け人を殴って死なせてしまった 4 年生も、きっと虫けら扱いの中から這い上がって「4 年神さま」にたどり着いたのでしょう。

でも彼は完全に間違っていました。自分がつらい思いをいやというほど味わったのですから、後輩をいたわるべきでした。それに神さまになったら下の者を虫けら扱いに出来るのでしょうか。聖書の神さまは違います。痛めつけてよい虫けらや奴隷などいない、どんなものも大事にされなければならないとおっしゃっています。どうしてでしょうか？

[2]安息日に込められた喜び

聖書は全 66 巻1700ページ余の書物ですが、「はじめに神は天と地とを創造された」という言葉で始まります。神さまが混沌と闇の状態から、第一日目に光を、第二日目に空と海を、第三日目に地と植物、第四日目に太陽・月・星の天体、第五日目に魚・鳥、第六日目に地上の生物と人間をお造りになったという天地創造が聖書の第一声です。

そして神の作品の全てがはなはだ良かったので、神さまは満足して第七日目に、すべての創造の仕事から離れて安息なされた。こうして神の天地創造のみ業が完成されたのだと述べられています。第七の日の安息は神の喜びと満足をあらわす特別な日だと言われている点に、聖書の特色があります。

このように神さまがお造りになった生き物は人間を含めてどんなものでも、みな非常に良いものでしたから、痛めつけ、ひねり潰しても当然だと言われるものは何一つなかったのです。たとえ虫けらでも神さまは非常に良いものとして満足なされた神の作品だったのです。

その証拠として、神さまはすべての生き物の食べ物として青草を与えておられます。魚も鳥も動物・昆虫・爬虫類もまた人間も、互いに殺し合い、食い合うことをしない世界だったのです。そこで預言者のイザヤは、救い主によってもたらされる理想の世界の回復を「おおかみは子羊と共にやどり、ひょうは子やぎと共に伏す。雌牛と熊とは食い物を共にし、ししは牛のようにわらを食う」(イザヤ11:6)と預言しています。弱肉強食は神さまが造られた世界を私たち人間が管理するようになってから生じた、悲しい現実なのです。

[3]魂の休息

私たちが仕事をする、働くという場合には、作業をしている状態だけを言います。それならば神さまの天地創造の作業は 6 日間で終わったこととなります。でも聖書は、「神は第七日にその作業を終えられた」。新共同訳では「第七の日に、神は御自分の仕事を完成され」と記述しています。仕事は安息をもって完成されるのです。本来は無くても良いのだけれども、主人の特別な慈悲で付け足されたプラス・アルファではないのです。ここに仕事とは本来、作業と休息とがセットにされているものだという考えが、きちんと示されています。

先程引用しましたように、出エジプト記 23 章の安息日の規定で神さまは、直接に労働に当たる家畜や人が元気を回復させることの大切さを教えられました。より良い仕事をしていくためには、休みが必要であり、良い休みが良い仕事を完成させていくのだから、安息日を守るようにとお命じになったのでした。では良い休息の取り方とはどのようなものなのでしょうか。

ユダヤ人たちは、安息日には会堂で礼拝する以外は、一切働いてはならないと考えていました。ところがイエス・キリストはそのような人たちが集っている礼拝の場で、病で苦しんでいる人を幾人もお癒しになりました。「安息日に善を行うのと悪を行うのと、命を救うのと殺すのと、どちらがよいか」

(ルカ6:9)。「自分のむすこか牛が井戸に落ち込んだなら、安息日だからといって、すぐに引き上げてやらない者がいるだろうか」(ルカ14:5)。苦しむ者、命の危機に直面している者を助けることこそ、安息日にふさわしいというのがイエスさまの心でした。

またイエス・キリストはこうおっしゃいました。「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう。わたしは柔和で心のへりくだった者であるから、わたしのくびきを負うて、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたの魂に休みが与えられるであろう。」(マタイ11:28~29)

イエスさまは「あなたがたを休ませてあげよう」とおっしゃりながらも、くびきをはずして重荷から解放して上げようとはおっしゃっていません。「あなたがつけているくびきを私のくびきと取り替えて、私に学びながら重荷を担ってごらん」とおっしゃっているのです。私たちは重荷を背負って生きていく労苦から解放されたいと願います。でも重荷を降ろして身軽に生きる人生などないのです。

「私のくびきに代えてごらん。重荷を耐えられないものになっているのは、くびきが体にピッタリ合っていないせいではないか。そして働き続けよう。あなたの魂に本当の休み・平安が与えられるよ」とイエスさまは語りかけておられます。靴が足に合わないと痛くなって歩けません。それと同じです。

イエス・キリストのくびきは柔和と謙遜のくびきです。「柔和」の反対語は「荒い、怒った、闘争心、悪意」です。荒々しさは心身をすぐ疲れさせます。柔和・優しさが平和と安息をもたらすのです。「へりくだり・謙遜」の反対語は「権力にある者、思い上がる者、富んでいる者」です。ですから謙遜は、神の力が働く低さ、弱さを言います。そうですね。私たちの心が荒々しくなっているからすぐに疲れるのです。誇り高ぶろうとあくせくするから疲れるのです。

イエス・キリストはベツレヘムの馬小屋で誕生されました。最も貧しい誕生です。でも飼い葉桶に寝かされた御子の笑顔には、平和と恵みの光が輝いていました。またろばの子の背中に乗ってエルサレムの都に入城し、「自分を救ってみろ」と口々に罵る人々を「父よ、彼らをお赦してください」と祈りながら、十字架の上で死んでいかれました。イエス・キリストこそ、柔和と謙遜のくびきをつけて救い主の勤めを全うされたお方です。その柔和と謙遜のくびきをつけて、イエスさまに学びつつ重荷を負う時に、私たちの魂に本当の休息が与えられるのです。

イエス・キリストはご自分を「安息日の主」(マルコ2:28)とおっしゃいました。そうです。このイエス・キリストこそ、安息日を本当に安息日にするお方です。

[結]積極的な証を

神さまは六日間で天地万物をはなはだ良いものにお造りになりました。そして非常に満足して第七日を祝福の日と定め、ゆっくり休まれました。そして天地創造の作業を終了されました。神さまは天地創造の初めから、仕事は安息をもって完成されると定められたのです。

そして私たちにも、「安息日を覚えて、これを聖とせよ」とお命じになりました。私たちの心も体も七日目には、六日間の働きを祝福していただき、元気を回復させる安息日が必要なのです。

ところが私たちの身の回りには、仕事の忙しさが続いて十分に休息を取れない、或いは責任の過重で独りで悩む結果、うつになってしまう人が、どんどん増えています。自殺する人が毎年 3 万人を超えています。働き詰めを通していたら、心と体が壊れてしまうのは当然です。今こそ私たちは安息日をきちんと守ることの大切さを、声を大にして周りの方々に訴えていかなければなりません。

私たちは働く毎日から我が身を切り離して、全く違う日、安息日を持つ必要があります。そして自分が神さまによってどのように造られたものであるかを、もう一度神さまから聞き直す必要があります。自分の人生や働きの意義を神さまからきちんと聞きとる必要があります。そしてイエスさまから愛のくびきを頂き、それを身につけて新しい一週間の歩みを始めたいものです。

Blue Monday(月曜病)という言葉がありますね。土日の遊び疲れで月曜日は仕事の能率が落ちる現象です。安息日は元気を回復して良い仕事をしていくための休日だったはずですが。もしも心がうつろだとしたら、神さまの祝福の言葉を聞かなかったせいではないでしょうか。イエス・キリストの柔和と謙遜にふれ、その愛のくびきを身につけて働くことを学ばなかったからではないでしょうか。

時間に余裕が出たら教会に行こうというのでは、なかなか安息日を持つことは出来ません。最優先にしてその時間を生み出そうと決断しない限り、易々と礼拝を守れるものではありません。でも私たちは今日礼拝に集ることができました。感謝ですね。この礼拝で安息日の主イエス・キリストから、霊の祝福を豊かに頂きましょう。

電通リサーチによりますと、日本人の10%が聖書を持ち、20%の人がキリスト教は良いと思っています。また政府の調査では70%の人が不安や悩みを持っていると答えているそうです。私たちは礼拝の喜びを、家族に、また回りの方々にもっともっと積極的に証ししていこうではありませんか。

完